

## ローマ人への手紙第九回質問

25 神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現すためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。

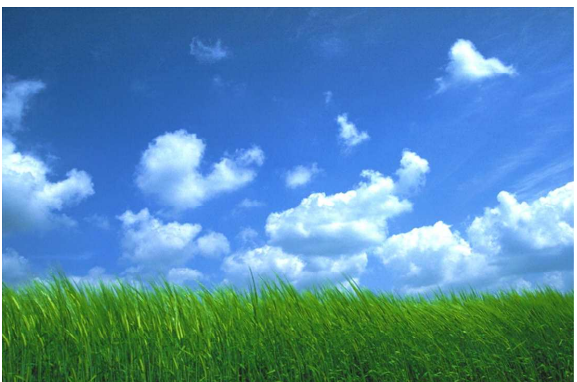
26 それは、今の時にご自身の義を現すためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。

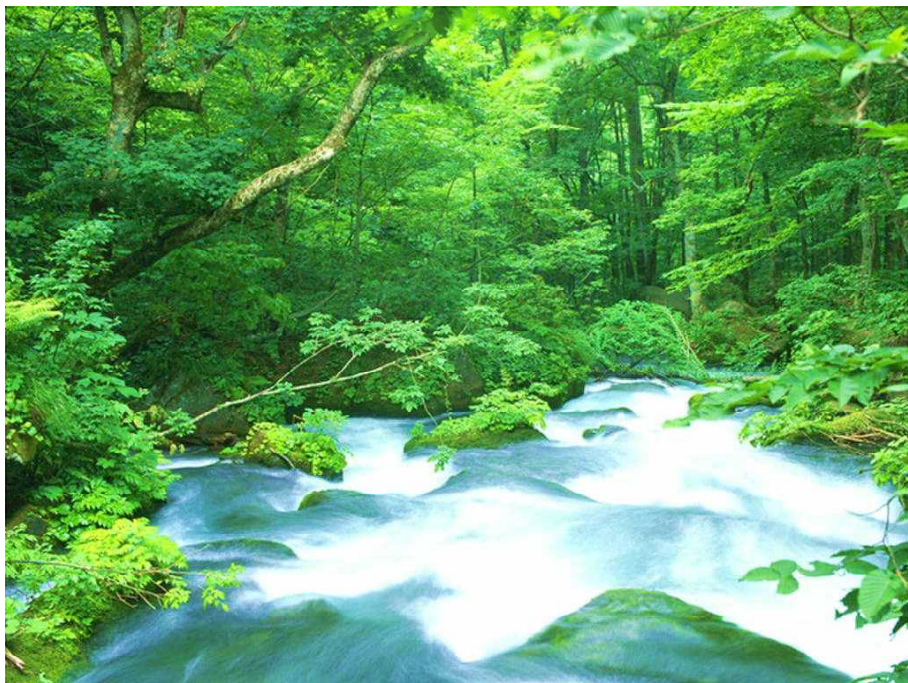
(ロマ三章二五―二六節／新改訳2017)

(問一)神は、聖く正しいお方として、罪と罪人に対して、罰を下さずにはおられない。「今まで犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがし来られた」(25節)。しかし、いつまでも見のがし続けることは、神の義に反する。必ず罰せられなければならないもの。どのように罰せられましたか。

(問二)神は聖く正しいお方であると同時に、愛のお方、恵みに富むお方である。人類がその罪のために滅び行くのを見過ごしになさることはできない。そこで、神は何をなされましたか。

(グループ聖書研究・聖書を読む会手引より)





## 十字架の秘儀

(ロマ三章二五―二六節)

世の多くの人々は、キリスト教を血なまぐさい宗教である  
と言って非難します。確かにわが国の宗教は、みなこのよう

に血なまぐさいことを言いません。しかし、前回の時に申しましたように、この血なまぐささは、実はわたしたち自身の罪に由来するものであって、わたしたち自身がそのような血なまぐさい罪を持っているためであることを見落とすことはできません。つまり、わたしたちの持っている罪が血なまぐさいものであることを知らないのであれば、問題の解決は、きれいごとですませることができません。しかし、わたしたちの持っている罪が血なまぐさいものである以上、わたしたちの身代わりに罪の刑罰を受けてくださった救い主は、実に血なまぐさい方法で死ななければなりませんでした。それが、あの十字架上の死です。

ところで、ある人々はこのように言います。神はどうしてイエス・キリストをなだめの供え物などになさらず、わたしたち人類の罪を赦すということになさらなかったのでしょうか。自由な赦しこそ、神の愛の証拠ではないかというのです。しかし、前回の時にも申しましたように、このなだめの供え物というのは、人間が神の怒りをなだめるためにささげたものではありません。あくまでも、これは神のなさったことであることに注意する必要があります。ですから、神がその御子イエス・キリストをこのなだめの供え物とされたことには、確かな理由と目的があったはずです。

神は、もちろん主権者として人間を自由に赦すことはおできになります。しかし、神は何の裏付けもなしに、人間の罪を赦すことをなさいませんでした。御子イエス・キリストをなだめの供え物として、わたしたちが受けるべき罪の刑罰と

して、十字架上でさばき、尊いいのちを捨てさせることによって、わたしたちを赦す道を備えてくださいました。

神は、聖く正しいお方として、罪と罪人に対して、罰を下さずにはおかれません。しかし、「今まで犯されてきた罪を、神はその寛大さをもって見のがして来られた」のです。けれども、いつまでも見のがし続けられることは、神の義に反します。それは、必ず罰せられなければならないものです。

「罪が支払うべき値は死<sup>1</sup>」であり、「罪を犯した者は、その者が死ぬ<sup>2</sup>」のです。

しかし、また神は同時に、愛のお方であり、恵みに富むお方です。ですから、人類がその罪のために滅び行くのを見過ごしになさることはできません。そこで、神はその尊いひとり子イエス・キリストをこの世に遣わし、神であり、同時に人間であるお方として、わたしたちの罪を背負い、わたしたちの身代わりとして、十字架上に死なせることによって、わたしたちを救うという驚くべきことをなしてくださいました。

このことによつて、神の愛だけでなく、義も全うされたのです。ここで、「それは、今の時に、神の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とされる方となるためなのである」と言われていることの意味がはつきりしたと思います。つまり、十字架こそは、神の愛の要求と同時に、神の義の要求が満たされたところで、詩篇の記者が「愛と真実が互いに出会い、正義と平和が互いに口づけしています<sup>3</sup>」と歌っていることにほかなりません。



もし人が罪を犯したということと捨て置かれ、神が造られたこの世界が、罪に汚れたままに放置されてしまふとしたら、神の義は貫き得なかつたと言われなければならないでしょう。また、罪が罰せられないまま、そのまま見のがされていき、創造の冠として造られた人間が、救われずに、滅んで行つてしまふのであるとしたら、これまた神の義が全うされたと言ふことはできないでしょう。神は、義なるお方ですから、確かに罪人に対してさばきを行なわれます。しかし同時に、創造の冠として造られた人間を、そのさばきの機会に、なんらかの方法で、救われなければならぬはずでです。そうでなければ、神の愛は本領を發揮せず、神の義もむなしくなつてしまいます。そこで、「神は、知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。」<sup>(4)</sup>それだけでなく、このことによつて、神の正義が貫徹されたのです。これがキリストの十字架です。ですから、キリストの十字架には、二つの意味があつたことがわかります。一つは、神の義が現わされたこと、そしてもう一つは、私たちが信仰によつて義と認められる基礎が与えられたということです。「こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とされる方となるためなのである」と教えられているとおりです。この二つの面、二つの意味というものは重要です。わたしたちは、キリストの十字架をとかくわたしたちの罪の救いのためだけだと思いがちですが、もう一つの面、もう一つの意味があつたということを見落としてはなりません。これは、さらに重要なことだからで

す。

キリストの十字架は、神が正しいお方であることを、神ご自身が立証されたという重要な意味を持っています。このことがなければ、わたしたちの救いも、実は土台を失ってしまっています。わたしたちの救いが大きな意味を持つてくるのは、信仰義認という教えが、罪人をそのまま義と認めるということは、黒を白と言うことにほかならず、つまり誤りを正當化する教えだという非難攻撃に対して、弁証しているところにあります。三章の初めのところに、パウロの語っていた福音に対する非難攻撃が取り上げられています。その中に信仰義認の教えを「善を来たらせるために、悪をしようではないか」という範疇に入れて、これを攻撃していたことを述べていますが、信仰義認の教えは、これを正しく受けとめられないと、黒を白と言う教えというようにとられかねません。しかしながら、もしも何の裏付けもなしに、ただ神が自由に罪を赦しているのであるとしたら、このように批判されてもしかたがありませんが、キリストの十字架という出来事によって、神の義の要求と愛の要求が、それぞれに満たされたのですから、このような批判は、全般的外れと言わなければなりません。神は決して間違ったことをなさったものではありません。また、そのようなことをなさるお方でもありません。それが神の義なのです。十字架の第一義的な意味はこのことです。

その上で、神はこの恵み深い贖いのみわざによって、主イエス・キリストを信じる者を義と認め、救ってくださいます。

「義とされる」<sup>(5)</sup>方という言い方は、原語では、法廷用語です。日本語では、この世の法律用語で言えば、さしずめ「無罪」の宣言に当たります。

ここで、わたしたちの救いについて、このような法律用語を使って、「義とされる」と言い、また奴隷売買の用語を使って、「贖い」<sup>(6)</sup>と言ひ、また神殿の宗教用語を使って、「なだめの供え物」と言っていることにより、キリストの十字架による救いの三つの面が表わされていると言つていいでしょう。それは、赦しと、自由と、贖罪です。これらは、すべて神の自由な、主権的な恵みによって、わたしたちに与えられるものです。神が、少しもごまかすことなく、しかも大きな犠牲をご自身が払われることによって、わたしたちを救ってください、みこころのうちが、よくわかるなら、わたしたちは、それを「信仰によって受ける」以外にはないはずです。そして、すでに信仰によって受けた人々は、その奥義のすばらしさをさらに深く味わい、主をあがめつつ歩む者になりたいものです。

注①ローマ教会への手紙六章二二節。

(2) エゼキエル書一八章四節 新改訳。

(3) 詩篇八五篇一〇節 現代訳。

(4) コリント教会への第二の手紙五章二二節。

(5) 「義とされる」方(三・二六)と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、ディカイウーント(Dikaiouvnta)ということばが使われています。これは、「義とする」という意味で、敬語として訳されています。

(6) ローマ教会への手紙三章二四節。

<聖書翻訳比較ノート>

【新改訳2017】すなわち、ご自分が義であり、イエスを信じる者を義と認める方であることを示すため、今この時に、ご自分の義を明らかにされたのです。

【新改訳改訂3】それは、今の時にご自身の義を現すためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。

【口語訳】それは、今の時に、神の義を示すためであった。こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである。

【新共同訳】このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。

【LIB改訂】そして今日も、神はこの同じ方法で罪人を受け入れてくださいます。イエスが彼らを、義と認めてくださるためです。しかし、このように、罪を犯した者を赦し、無罪を宣告するのは、神の公正なやり方に反するのでしょうか。いいえ、そんなことはありません。なぜなら、彼らが自分の罪を帳消しにしてくださったイエス様を信じたという事実に基づいて、神はそうなさるからです。

【NKJV】 to demonstrate at the present time His righteousness, that He might be just and the justifier of the one who has faith in Jesus.

【KJV】 To declare, I say, at this time his righteousness: that he might be just, and the justifier of him which believeth in Jesus.

【NIV】 he did it to demonstrate his justice at the present time, so as to be just and the one who justifies those who have faith in Jesus.

ἐν τῇ ἀνοχῇ τοῦ θεοῦ, πρὸς τὴν ἔνδειξιν τῆς δικαιοσύνης αὐτοῦ ἐν τῷ νῦν καιρῷ, εἰς τὸ εἶναι αὐτὸν δίκαιον καὶ δικαιοῦντα τὸν ἐκ πίστεως Ἰησοῦ.

<文法解析ノート> Rom 3:26

- [1] ἐν ἐν pd 前) 与 中に、間に、で、よって、に、  
 [2] ὁ τῇ ddfs 冠) 与 女単 冠詞(この、その)  
 [3] ἀνοχῇ ἀνοχῇ n-df-s 名) 与 女単 忍耐  
 [4] ὁ τοῦ dgms 冠) 属 男単 冠詞(この、その)  
 [5] θεός θεοῦ, n-gm-s 名) 属 男単 神  
 [6] πρὸς πρὸς pa 前) のところへ、の近くに、のために、に対して、について  
 [7] ὁ τὴν dafs 冠) 对 女単 冠詞(この、その)  
 [8] ἔνδειξις ἔνδειξιν n-af-s 名) 对 女単 公に示すこと、証明  
 [9] ὁ τῆς dgfs 冠) 属 女単 冠詞(この、その)  
 [10] δικαιοσύνη δικαιοσύνης n-gf-s 名) 属 女単 正しさ、義  
 [11] αὐτός αὐτοῦ npgm3s 代) 属 男3 彼・それ(三人称の代名詞)、自身(強調用法)、同じ、まさに  
 [12] ἐν ἐν pd 前) 与 中に、間に、で、よって、に、  
 [13] ὁ τῷ ddms 冠) 与 男単 冠詞(この、その)  
 [14] νῦν νῦν ab 副) 今  
 [15] καιρός καιρῷ, n-dm-s 名) 与 男単 時期、機会  
 [16] εἰς εἰς pa 前) 对 ~へ、まで、のために、に対して  
 [17] ὁ τὸ dans 冠) 对 中単 冠詞(この、その)  
 [18] εἰμί εἶναι vnppa 不定) 現能对 ある、~である、~です  
 [19] αὐτός αὐτὸν nppam3s 代) 对 男3 彼・それ(三人称の代名詞)、自身(強調用法)、同じ、まさに  
 [20] δίκαιος δίκαιον a--am-s 形) 对 男単 正しい、公平な  
 [21] καί καί cc 接) 等 そして、~さえ、しかし、しかも、それでは、そうすれば  
 [22] δικαιοῦντα δικαιοῦντα (ディカイウーント) vppaam-s 分) 現能对 男単 正しいことを証明する、義とする  
 [23] ὁ τὸν dams+ 冠) 对 男単 冠詞(この、その)  
 [24] ἐκ ἐκ pg 前) 属 から、によって、で  
 [25] πίστις πίστεως n-gf-s 名) 属 女単 信仰  
 [26] Ἰησοῦς Ἰησοῦ. n-gm-s 名) 属 男単 イエス